

秋休み企画「親子哲学カフェ」 実施報告

テーマ：幸せとは何か

開催日：2018年10月10日（水）

今回は、「幸せとは何か」をテーマに、大人と子ども、それぞれ10人程度ずつ総勢20人ほどが参加しました。当日は子どもの参加が多く、哲学カフェ開始前から賑わいを見せていました。帝京大学からは、本学宇都宮キャンパス総合基礎科目講師 江口建、サイエンスらいおん客員研究員 藤平昌寿、また、以前宇都宮市でNPO法人として子どもの教育活動に携わっていた方も参加し、年齢や経歴もさまざまな参加者が集まりました。

まずはその場の緊張をほぐすために、アイスブレイクを行いました。子どもが多く参加していたということもあり、子どもに人気の漢字ドリルにも用いられている題材を用いました。無人島に流されたという設定で、2つのうちどちらか1つを必ず選ばなくてはならない究極の選択の場合、「カレー味のウンコと、ウンコ味のカレー、どちらを選ぶか」というテーマで行いました。

参加者からはさまざまな意見が出ました。カレー味なら食べられるかもしれない、生きのびるためには栄養価があるカレーを食べる、ライスだけ食べればいいのではないかなど、究極の選択に迫られた場合、自分はどのような行動をとるかを参加者たちは真剣に考えました。さて、これは一見下品な思考ゲームのように思えますが、実は2つの側面から、哲学的に重要な問題を含んでいます。

まず1つ目ですが、この問題は私たちが「A」を「A」であると認識するとき、そこにはどのような基準があるのか、ということをお問わせてくれます。

例えば、私たちがリンゴを「リンゴ」と認識するのは、なぜでしょうか。それは、その物体が「丸い」形をしていて、「赤い」色をしていて、食べると「甘酸っぱい」味がするといった知覚情報を総合して「リンゴ」と判断しているからです。では、丸い形をして、赤い形をした、リンゴそっくりの「赤いパプリカ」を食べたら、それをリンゴだと思うのでしょうか。恐らく、ピーマン特有の味がするので、それをリンゴだとは思わないのではないのでしょうか。

その場合、最先端の技術を使った化学的処理を施して、赤いパプリカの味をリンゴそっくりの甘酸っぱい味に変えることができたとしたらどうなるのでしょうか。そのとき私たちは、それを赤いパプリカだと認識するのでしょうか。さらに、品種改良をして、固さや手触りもリンゴに近づけたら、それは「赤いパプリカ」なのでしょうか。それとも「リンゴ」なのでしょうか。

あるときは「X」を「カレー」であると認識し、またあるときは「X」を「ウンコ」であると認識する。そのとき私たちは、何を判断材料としているのでしょうか。カレー味のウンコは、はたしてウンコなのか。カレー味のウンコは、もはやウンコではなく単純にカレーではないのでしょうか。今食べている「カ

レー味のウンコ」が、本当は「ウンコ」であるということを誰からも教わることなしに、私たちはそれが「ウンコ」であることを、どうやって知ることができるのでしょうか。

さらに言えば、カレーが「カレー」でありうるのは、なぜなのでしょう。カレーにはさまざまな種類があり、先だって、「カレー」というものの本質が存在するのか、それとも、実際にはさまざまな種類のカレーだけが存在して、「カレー」なる一般概念は、あとから人間が作った「名前」にすぎないのでしょうか。

これは、中世神学における普遍論争と呼ばれるものです。中世の神学者たちは、「目の前にあるウンコ味のカレーに先立って、カレーの本質が存在するかどうか」を、「唯名論」と「実念論」という立場に分かれて大真面目に議論を交わしました。

そして 2 つ目ですが、この問題は、何かを判断する際、私たちが何を大事にして生きているのかということに回答者に突きつけます。この質問に答えようとするやいなや、自分が何らかの判断をするときに、意識的にせよ無意識的にせよ、何に価値を置いているかが端的に表れます。

例えば、「カレー味のウンコ」を選んだ参加者は、「中身」よりも「実際に感じられるもの」を大事にしている可能性があります。あるいは、今この瞬間の快樂、または幸福に価値を置いているのかもしれません。逆に、「ウンコ味のカレー」を選んだ人は、五感で感じられるもの、表面に表れたものよりも、物事の本質、本当はそれが何であるかを追究して生きている人かもしれません。あるいは、刹那的な快樂よりも、将来のことも含めて実利主義的な判断をするタイプかもしれません。だからこそ栄養価を考えて、今まで食べたことのない味だけれども、カレーという「内実」を重視したのかもしれません。

このような、「味」を取るか「実」を取るかという選択問題は、哲学史上では「仮象」と「本質」の対立をめぐる問題として扱われてきました。仮象というのは表面に表れたもの、見かけのことであり、本質というのは、「本当はそれが何であるか」ということです。この 2 つが、一致しているのか一致していないのか、一致していないとすればどの程度一致していないのか、それを考えたのがカントという 18 世紀ドイツの哲学者です。そして、存在するのは「現象」のみであって、感覚につながらない対象は存在しないという立場が「現象主義」と呼ばれます。現象主義の立場によれば、「カレー味のウンコ」は、「カレー」ということになりそうです。

以上のことにより、このアイスブレイクは、裏にある隠れた哲学的テーマを軽やかな話題で包んだ見事な思考ゲームであると言えます。

さて、実はこのアイスブレイクが哲学カフェでは大切な前振りであり、今回の対話テーマが導き出されました。「カレー味のウンコと、ウンコ味のカレー、どちらを選ぶか」という質問は、私たちが何を大事にして生きているのか、という質問でもあります。

この究極の選択において、2 つの選択肢のうち 1 つしか選べないとしたら、私たちはどこに価値を置くのでしょうか。ここから、「自分にとって大事なものは何か」「何があれば、自分は幸福だと思えるのか」

という問いが浮かび上がってきました。

大人と子どもの双方から、さまざまな幸せの形が出ました。ほしいものがもらえたとき、大切な家族や友達がいてくれること、希望のある安心した時間、1日1回でも笑顔でいられることなど、さまざまな感じ方があるようです。大人たちは考え過ぎるせいか答えづらいようでした。それに対して、子どもたちは思ったことを直感的に述べてくれました。ただし、欲望を言い出すと際限がないので、「どのような夢が叶えば幸福か」ではなく、「最低限、何と何があれば自分は幸福だと思えるか」という最低ラインを考えました。

幸せのはじまりとは、何なのでしょう。子どもの発言で印象に残っていることが、「住める家があり、食事が食べられて、家族がいて、普通の生活ができること」という回答です。私たちにとって当たり前のことがありがたいのです。しかし、当たり前を当たり前に享受できることは、世界を見渡せば、いかに当たり前でないかがわかります。

今回は大人数で、膨大かつ広範な話題になったため、主な論点を2つに絞りました。

【論点その1】

幸せは自分でつかみ取るものか、それとも、幸せ自体が近づいてくるのか

きっかけは、「幸せはつかめるものなのか」という子どもの発言から始まりました。それに関して、幸せ自体が近づいてくるように感じる、幸せは見えないがいつでも目の前にあるように思うといった意見が出ました。これは、一理ある意見です。目の前にないものはつかみようがありません。逆に、幸せ自体が近づいてきても、自分がかまなければ素通りしてしまうということです。

【論点その2】

幸せは自分ひとりでも成り立つか、それとも、他の誰かと一緒に築いていくものか

どうやら子どもにとっての幸せとは、自分ひとりだけで成立するものではなく、誰かと一緒に、例えば家族などの大事な人と一緒にいることによって醸成されるものであるということがわかりました。子どもたちが幸せだと感じることは、単純にほしいものがもらえて嬉しい、遊びに連れていってもらって楽しいという刹那的なこととは違い、持続的な、安心感が伴っているときのようです。

この意味で、哲学カフェに参加した子どもたちは、すでに「幸福」の意味を、ある程度自分たちの中で感受しているという印象を受けました。ただ単純に「うれしい・楽しい」ということと「幸福感」の微妙な差異を、子どもなりに感じ取りながら生きているようです。そして、言葉にできないような自分の気持ちを、必死に言語化しようとしてくれたことが大変印象に残りました。

対話の終盤は、「幸せとは何か」というテーマから、逆に「どのようなときに幸せでないと感じるか」という話になり、子どもたちから正直な不満があげられました。やはり子どもたちは普段の生活の中で、多くの不満を抱えて暮らしているようです。子どもたちが内心納得できない主なことは以下の通りです。

- (1) 自分で物事の順番を考えているのに、なぜ1番最初に宿題をやらないといけないのか
- (2) 今通っている習い事の中には興味が持てないものもあるが、今後続けなくてはならないのか
- (3) ゲームや遊びの自由時間は自分で決めたいのに、なぜ自分で決めさせてもらえないのか

子どもというものは、親や教師の前では我慢していても、心のどこかで引っかかったまま、ただそれをあまり頻繁には口にせず暮らしているということが哲学カフェを開催するたびに明らかになります。しかし、それはごく当然のことで、それどころか、よい傾向ではないかとすら思います。なぜなら、大人と子どもは基本的に、欲望の種類、時間の使い方、人間関係の作り方、ルールなども違うからです。大人が決めたルールに全く不満を感じないで、子どもは暮らせるのでしょうか。

大人の押しつけを、「なぜそうなのか」と疑いもせず素直に受け入れるよりは、心のどこかで疑っているながらも、表向きは大人の作法に従ってみせている子どもは、ある意味で社会性の第一歩を踏み出しているとも言えます。つまり、空気が読めて、本音と建て前を使いわけているということです。

小学生程度の子どもが、大人の事情と理屈を完全に受け入れるということは、能力や経験の量から考えて相当難しいことでしょう。また、多くの不満が出てくるということは、逆に言うと、それだけ親のことを信頼している証拠だとも考えられます。そもそも、家に帰ってから酷く怒られるのではないか、親には言っても無駄だと思っている状態では、不満や愚痴すら口にできないのではないのでしょうか。

そのような子どもの不満があることは、大人としては、内心たくさんの不満を抱えていた、とショックを受ける必要は全くなく、わが子は健全に育っていた、と安心してよいのです。子どもとはそういうものだ、と事実を認識するだけで、まずは十分かもしれません。むしろ、日頃抱えている不満を哲学カフェという場で思うままに口にできるということは、子どもがのびのびと発言できるような育て方をしているのでしょうし、まさにそのような家庭環境、親子関係を作ってきたという証拠であり、そのことに自信を持ってほしいと考えます。少なくとも哲学カフェという場で、子どもが自分の本音を、自分の言葉にして大人に伝えたことは褒めるに値するのです。なぜなら、哲学カフェは、言いたいことを言うための場だからです。

今回の対話から再認識できることは以下の通りです。

1. 理想的な教育やしつけを施しているように見える家庭でも、子どもは不満や愚痴を抱えているものであり、それはそれでよい傾向であるということ
2. 聞き分けのよい子どもを育てること自体は別段理想的な教育でもなく、哲学的に考えると、子どもが素直に大人の言うことに従うことは、あまり「褒められるポイント」ではないということ
3. 子どもの「理性」の開発は、大人が言うことを「疑う」ことから始まるということ

3については、大人になればさまざまなことを自然と疑わなくなります。そして、聞き分けの悪い子どもを育てることがよい教育だということでもないため、そこが教育の難しいところではあります。

さて、ここまで「大人」と「子ども」という言い方を普通に使ってきましたが、そもそも、「大人」とは

何なのでしょう。まさにこれが今回もまた、大人の基準は何だ、大人とは誰のことだ、という子どもから再び出た疑問でした。この子どもの真摯な問いかけに答えないまま「大人の言うことを聞きなさい」と言っても説得力がないので、大人を自認するひとびとは、そろそろ「大人とは何か」を真面目に考えなければなりません。逃げているだけでは、子どもたちの疑問は解消されません。

そして、子どもから次回考えたいテーマとして、「自分がやりたいことをする時間を、自分で決めてはいけないのか」が候補としてあがりました。親としては、自分で決めていいとは即答しがたいことでしょう。また、哲学カフェ終了後、ある参加者のお子さんが「中学生になったらスマートフォンを持つことについて、ぜひ対話をしたい」と述べていたそうです。

前半のアイスブレイクが子どもの興味をひくテーマで收拾がつかない場面もありましたが、後半のテーマでは対話をする雰囲気になったことに驚きを隠せません。「人の話を聴く」「言葉にして話す」という哲学カフェのルールを根気強く説明してきましたが、そのルールを守って対話をしようと努力する子どもたちは、のびしろが広いとも感じます。

ある参加者は、自宅に帰ってから自由時間の定義やゲームとのつきあい方などをめぐって、さまざまなことを親子で話し合ったそうです。「子どもの話を聞けば聞くほど、親と子どものギャップがたくさん出てきた。また、逆に思わぬところで意見が一致していておもしろかった。息子にとって、哲学カフェで言いたいことが否定されずに受け入れてもらえた感覚が、心地よかったようだ」とのことで、哲学カフェが終わってすぐにフィードバックをもらったことに驚いたそうです。

その他、「親子のギャップに驚いた。また、そのギャップに気がつくことができ、大収穫だった」「いつもより充実した時間を過ごすことができた」「今までで1番頭が疲れた哲学カフェだった」という感想があり、哲学カフェの目標である自分の気持ちを言葉にして他人に伝えること、他人の話を聴くことができた充実した時間だったと言えます。

自分のやりたいことをする時間を
自分で決めたいですか？

幸せのはじめとは...

1つの命の大きさ

大事な人が一緒に
私にと、その幸せ。

自分一人の幸せは

すごい(大事)なことか

大変なときにがんばる自分が好き

安心

高たはまっている
環境

頭の中にどれだけの

自分に肯定と否定の感情があるか

何と大事に生きているのか

御待士

生きる努力をしないと幸せとまんきつできない。

幸せな気分で最期をむかえたい。

幸せとは...

自己肯定
は定
か
い

幸せをつかめばいいですか？

つかめない

自分以外を力に
くれないと。

もらう 安心すること

やるべきもの

目の前に見えないものは

挑戦

常にまわりにあるもの

楽に生きていること

達成感

苦勞を7割かかると
とや、2割ほど

つかめる。

自分自身をつかみに
いくこと。

自分が行動をおこす

自分の感覚次第で
つかめるもの

苦勞は

未来に
つながる。

幸せじゃないと
1つ4つたのにな
やれない!! とかかると

・ 幸せを感じる人が少ない
・ 幸せを感じる人が少ない
・ 幸せを感じる人が少ない
・ 幸せを感じる人が少ない

幸せをどうつかうか

自分以外の人、その

もらう やった

自分

自分の
状態

あるべきままだ

受け入れる。

気付くことが大事

自分でやりたいときに
やれたー!!

環境
が
あつた
前提
なのでは?

あつた
前提
なのでは?

幸せの基準

- ③
- 大切な物や人
 - 友達がいてくれること
 - 希望をもった気持ちに時間
 - 家族・友達 (自分以外の人)
 - 命があること
 - 住める家、ニハム 普通の生活
 - 本 ぬくもり (好き)
 - 他人より二人で出来る
- 満足出来る環境
- 喜び・成長に繋がる大切さ

なくない
ほしい。

- ④
- 107 days ago ~
- 自分がいける。仕事や体が
 - 自分が大好き。で喜に
 - 健康。笑える。いけること
 - 家族、大切な人。ニハムが
 - 自分が笑う。わがまま
 - 自分にとって嫌なことはない
 - その日1日に1回も
 - 笑っていられること
 - 昔 好きな事をやるとは幸せ
 - いけること。ニハムに
 - して
- 今 大切な人、好きな人がいれる
- 自分を肯定できるかどうか

うれしいこと④ についで

幸せと幸せは比較出来ない

好きな食物、旅行、お出かけするとき

待つ

